「底が突き抜けた」時代の歩き方576

最貧困層にこそ融資する「グラミン銀行」の画期的な発想

０６年のノーベル平和賞は、バングラデシュのグラミン（村落）銀行と、その創設者であるムハマド・ユヌス（６６）が受賞した。「マイクロクレジット」と呼ばれる、貧困者向けの無担保少額融資によって「バングラデシュの貧困撲滅に貢献しただけでなく、世界に貧困金融のモデルを示した」ことが受賞理由である。この「マイクロクレジット」は、既存の商業金融制度や経済学理論の発想を逆転させた画期的な事業として、世界６０カ国以上に普及している。き文康隆は「辺境の革新的資本主義に何を学ぶか」（『Foresight』０６．１２）の中で、ユヌスが「マイクロクレジット」を考案したきっかけについて、こう記している。

《１９７２年、バングラデシュの独立とともに米国から帰国した少壮の経済学者、ムハマド・ユヌスは、大学で経済学を教えながら、７４年の大飢饉によって数百人単位で死んでいく国民を目の当たりにした。学問の無力を感じつつ、みずからのポケットマネー２７ドルを元手に、農村の貧しい人びとを相手にマイクロクレジットを始める。

世界規模で広がる貧困撲滅のシンボルとして、ユヌスの立志伝は、クリントン前大統領やカーター元大統領ら米国の民主党リベラル派などによっても評価され、９０年代後半にはすでにノーベル平和賞の有力候補に挙がっていた。それだけに、今回の受賞に意外感はない。注目すべきなのは、貧困脱出のエネルギーを、銀行業という、最も資本主義的な手法のなかに見出したことにある。》

岐阜女子大学南アジア研究センター客員教授の福永正明は「貧困層支援でノーベル平和賞　ユヌス氏とグラミン銀行」（『世界週報』０６．１１．２１）の中で、もう少し詳しくユヌスの活動と、専攻した「現代経済学の無力さを痛感」していた彼の模索に言及している。米国の大学で経済学准教授を務めていた頃、７１年にバングラデシュ独立運動が始まると、彼は在米ベンガル人の運動支援団体「バングラデシュ市民委員会」「バングラデシュ・インフォメーション委員会」を設立し活動しただけでなく、独立運動活動家の支援組織「バングラデシュ国防連盟」にも積極的に関わった。

《この独立運動への参画は、ユヌス氏のベンガルの大地とベンガルの人々への熱情を高め、また、座学による経済学者ではなく行動する知識人としての自覚を促したとされる。

バングラデシュ独立後に帰国したユヌス氏は、チッタゴン大学の経済学部長に就任した。しかし７４年８月、大洪水のため食糧飢饉が発生、全国で餓死者５万人の事態に直面した。ここでユヌス氏は、次々と餓死する人々を救うことのできない自らの学問に疑問を感じた。それは「現代経済学の無力さ」だった。死期が迫る貧者の側に立ち、苦難

の貧困から脱する方策を考えたという。

「貧しい人たちが最も必要とするものは何か」との問いに答えを求め、大学近くのジョブラ村で聞き取り調査を実施した。インタビューした女性４２人の話は、金貸し業者から材料購入費を借金し、製品完成後に手間賃と借金が相殺され、手元には何も残らない厳しい現実であった。「わずかなお金も持てない」「少しの材料も買えない」ことが、貧困から抜け出せない原因であった。そして、商業銀行は金貸し業者よりも高利息であり、当然ながら零細な貧困層の竹細工作りの女性たちに融資は行わない。

大きな衝撃を受けたユヌス氏は、「少しの元手となる現金を持つ」ことが、貧困脱却の道であると実感した。女性たちに尋ねると、必要な現金はわずか合計２７ドルであった。ユヌス氏はポケットから現金を出して担保はないまま、「少しずつ返せるときに返してくれればよい」と言って渡した。これが、グラミンバンク活動の発端である。

それ以後ユヌス氏は、貧困・低所得層救済のための計画やプロジェクトを立案し実行、７６年にグラミンバンクが創設された。》

「グラミン銀行」は銀行の形態をとっているけれども、銀行のありかたを超える、お金を人々の苦境を救う最大のコミュニケーションの方法として駆使しようとしているのが感じられる。「貧しい人たちが最も必要とするものは何か」という問いに対する本当の答えは、お金ではなく、苦境を乗り越える相互扶助の関係であったにちがいない。その関係をつくりだすことができるなら、お金は関係のなかから湧き出してくる筈であった。その関係をつくりだすのが困難であったなら、わずかなお金で人々が結合されて関係が生みだされてくればよい、というのが「グラミン銀行」の発想であったとみなせる。関係のなかからお金を生みだすために、お金のなかから関係を生みだしていけばよい、という逆転の発想であった。

《貧困脱出のエネルギーを、銀行業という、最も資本主義的な手法のなかに見出した》

ところに注目するき文は、《革新は辺境に生まれる。マイクロクレジットの成功は、最貧困のバングラデシュのイスラム社会、それも女性のなかに宿っていた資本主義精神の発露の物語》と捉える。だが彼は銀行という形態にあくまでも固執するから、そうとしかみえなくなっている。固執しなければ、《資本主義精神の発露の物語》以外に、さまざまな物語が隠されているのがみえてくる筈だ。異なる言いかたをしてみる。商業銀行の顧客の対象の中には貧乏人は含まれていない。銀行というものが資本主義制度の象徴であるなら、貧乏人は資本主義社会では存在していないことになってしまう。確かに貧乏人は資本主義社会では存在していないかもしれないけれども、生存していることは間違いない。ここで、貧乏人にとって銀行とはなにか、という問いが無用な問いであったなら、貧乏人にとっての銀行がもし存在することができるなら、その銀行は今の銀行とは異なるどのような形態をとるか、という問いが生みだされてくる筈だ。これまで銀行に無縁であった貧乏人が自分たちの問いを見出して、その問いのなかに答えをつくりだそうとすることが大変重要であったのだ。

き文によれば、ユヌスはフォーサイト９６年１１月号への寄稿文「貧困のない世界を目指して」の中で、「貧乏人を排除すること」「性差別をすること」「読み書きのできない人に冷たいこと」の三点を、《従来の銀行の根本的な問題》として挙げている。そうであるなら、グラミン銀行はこの三点の上に立って創設されればよいことになる。彼はこう解説する。

《グラミン銀行はこの三点すべてを逆手に取ることで成功する。

第一の問題については、「グループ制に基づく融資と、仲間同士の監督」という方法を取り入れた。同じ種族の仲良し５人組を一グループとして返済の連帯責任を負わせることで、無担保のリスクを回避したわけだ。

第二の問題については、イスラム社会で長い間、発言の機会を制約されていた女性こそが発展の鍵を握ると、ユヌスは当初から考えていた。女性の借り手を意識的に拡大した結果、現在のグラミン銀行の貸し出し先の９７%が女性である。

第三の問題については、教育を受けていない顧客に対して契約方式を極端に簡略化する一方で、サインの仕方や出納帳の付け方などをグラミン銀行自らが教育している。

こうした常識破りの経営方針で、グラミン銀行は融資総額５７億ドル、借り手は６６７万人、全国に２２４７店舗の支店を持ち、バングラデシュ国内で７万２千以上の村をカバーする銀行に育った。

資本主義が生み出す貧困は、社会主義的な政策で退治するというのが、これまでのわれわれの常識である。ユヌスのやり方はそれを覆した。バングラデシュ建国３０年の歴史のなかで花開いたグラミン銀行のシステムは、世界銀行や米国なども巻き込んだ、貧困救済の世界システムになりつつある。》

従来の銀行が「貧乏人を排除する」のは、貧乏人は返済のリスクを負えないことと、貧乏人相手では儲からないからだ。グラミン銀行は従来の銀行のように大きく儲けず、零細貸し付けによってコツコツと返済されてくる元本と利子で成り立つ仕組みであったから、返済のリスクさえクリアーすればよかった。そこで「グループ制に基づく融資と、仲間同士の監督」が考案されたが、返済のリスクの問題はこのとき、お金を共に借りることによる濃密な関係の確立の問題へと移行したのである。

「性差別」の問題については、イスラム社会における抑圧された女性の問題を超えて、生活以外の諸事情でお金を必要とする場合が多い男性と異なり、生活苦と直結するお金の必要性にたえず迫られている女性の位置を考えるなら、生活苦を乗り越えようとする女性たちをわずかな金額の融資によって励まそうとする試みとして捉えられる。そこには生活の破綻がわずかなお金で回避できるなら、積極的に手を差し伸べてあげようという、資本主義社会を超えた、損得に縛られない自由な精神が息づいていると考えられる。

従来の銀行が「読み書きのできない人」を相手にしなかったのであれば、グラミン銀行は貧乏人以外に「読み書きのできない人」も相手にしなければならなかった。《教育を受けていない顧客に対して契約方式を極端に簡略化する》のは、単に「読み書きので

きない人」に対して難解な契約方式を避けるという侮辱的な考えからではなく、契約を重視する従来の銀行に対して、相手を信用してお金を無担保で貸すことを人と人との関係のなかでの基本的な行為と把握するが故の、簡略化であったと推測される。更に、読み書きができなければ、グラミン銀行を通じて読み書きができる一歩へと踏みだす機会になればいい、という考えも浸透していた。

誤解してはならないのは、グラミン銀行は貧困のためにお金を用立てるけれども、お金は貧困脱却の道として成長させてほしいという祈りがそこにはこめられていたことである。お金と共に生活への意欲、事業への意欲に対する、目にみえない期待も融資されていることを見逃してはならない。《それは、竹細工などの工芸、農産物の加工や畜産、小売業などの小規模な事業を始めたい人に必要な少額資金（１００ドル程度）を貸し付ける仕組みであり、何らかの新たな収入を得る事業を始める意欲のある、しかし資本を持たない人々を対象とする。それらの人々は土地も資産ももたない貧困層であり預貯金もない。》（福永正明）グラミン銀行は実にバングラデシュ全土の８６%の村を網羅しており、返済に連帯責任を負うが、弁済義務はないことを特記しておかねばならない。福永は融資の中味について説明する。

《これまで５７億２０００万ドルの融資が実行され、完済は５０億７００万ドル、返済率は９８・８５%と高い。バングラ政府は銀行貸付利率を１１％と規定するが、グラミンバンクの貸付利率は、大規模事業資金ローン２０%、住宅ローン８%、学生ローン５%、最貧困層ローン０%の低率に抑えられ、預金利率は最低８・５%、最高で１２%である。貸付資金の金額が預金で調達され、預金の６３%がグラミンバンクの借り手たちの預金である。預金総額が貸付総額を１２３%と上回り、過去３年度（９３、９１、９２）以外は黒字決算を続ける。

資産を持つ人には貸し出さないことは、資産を持つ人にしか資金を融資しない一般金融機関とは、逆の発想で成り立つ。（中略）貧困とか低所得との概念は経済動向により変化し、また個々の家庭状態でも変化する。小さい子が成長し就職すれば家計は助けられ、病人が出れば医療費支出が増額する。そのため、グラミンバンクは「借り手の貧困レベル」について１０の指標を定める。

担保なしでの融資は、デフォルト・リスク（貸し倒れリスク）が高い。そこでグラミンバンクが初期に導入したのは、グループ・レンディング（連帯責任制）である。最初に５人グループを結成して２人に貸し付けを行い、２人への貸し付けの第１回返済が予定通り実行後、４～６週間で別の２人のメンバーに貸し付け、さらに４～６週間後に最後の１人に貸し付けを行う。この融資サイクルは、バンクの与える信用枠を拡大させ、徐々に住宅の建設、子弟の教育資金などの大きな資金借り入れが可能となる。

５人グループの貸し付けシステムは、次の利点がある。まず、グループ結成時に返済可能な人をお互いに選び、当事者が「より良い借り手」を選別すること。次に、貸し付けが開始されるとお互いにメンバーが返済を確認や監視して、返済能力は有していなが

ら悪意で返済しない事態を回避できること。

このシステムは、貸し手よりも借り手メンバーの方が借り手について実情を知り、情報があることが特徴となる。家族同士の付き合いが深い隣家や、毎日顔を合わせる工芸仲間であるから可能である。しかし、都市で名字もしらないような付き合いの場合には困難であろう。つまり、日頃の生活で暮らしぶりや人柄を理解していることが条件となる。もちろん、その人物が、少ない元手をうまく活用して利潤を上げる能力を持つか不明な点は残る。

借り手に関するマイナス情報の取得と活用が、貸し手側ではなく借り手側により行われる。そして、そのリスクを借り手側グループが負うところがカギとなる。借り手側は最初のメンバー選択だけで関門を抜けたようだが、実はそのために最も貧困に苦しむ人や家庭は最初から排除される。さらに、返済が滞るなどで５人グループから「外された」世帯には、最後の社会的基盤となる身近な信頼からも排除されたことになる。》

グラミン銀行の試みは前進しながらも、いや、前進すればするほど、次々と大きな障害や難関が立ち塞がってくるのが、この記述からみえてくる。前進ということが障害や難関を突破していく度合いで測られるものなら、突き進めば進むほど障害や難関もより強大さを増してくるのは当然といえるだろう。したがって以上の記述は、グラミン銀行の否定的な側面としてみるよりも、グラミン銀行の目指すべき課題が大きく膨れ上がりつつあるとみなすべきである。福永は《この活動が貧困削減にどのくらいの効果があるのか、という根本的な問題》に視線を注ぐ。

《「借金をして頑張れば、それだけ一生懸命に働く」とする評価も多く、女性の地位向上に果たした役割は重要である。しかし、イスラム世界の女性たちが、男性の支配下で生活しているからこそ、返済率が高い、あるいは逆に女性にだけ生計負担を過重にするとの批判もある。そして、借金をしなければならない社会や経済構造の矛盾や問題は、棚上げされている。

そして、借金は他者から借りた金でしかなく、自分の金ではない。借金をしなくても済むよう、生活を導く体制をつくること、それが本来の人間あるいは経済の活動でなければならないはずである。

ノーベル平和賞受賞のニュースとほぼ同時に、ユヌス氏が活動するバングラデシュは政局混乱と治安悪化が報じられている。議会議員の任期満了により、暫定政権を樹立し円滑な総選挙が行われなければならないが、その方策をめぐり対立は激しい。バングラデシュでは、国家の政治も経済も安定しておらず、人々が少額借金に頼り自活することが国際的に称賛されている。》

き文康隆がグラミン銀行について、《注目すべきなのは、貧困脱出のエネルギーを、銀行業という、最も資本主義的な手法のなかに見出したことにある》という見方を示しているように、我々が資本主義社会で生存しつづける以上、《借金をしなくても済むよう、生活を導く体制をつくること》など、到底不可能である。銀行を必要としない資本

主義社会体制をつくる必要がある、と主張していることになるからだ。それに、そのような体制づくりはグラミン銀行の役割ではない。バングラデシュがどんなに政局混乱と治安悪化に揺れようとも、いや、だからこそ、グラミン銀行のような「貧者のための銀行」はより一層不可欠となってくるにちがいない。人間は地獄のような境遇にあっても、這いつくばりながら生活しなければならない存在だからだ。

もちろん、福永にそんなことがわからない筈がない。彼はグラミン銀行が「貧者のための銀行」として固定しつづけることを危惧しているのだ。《今回の授賞は、人間が動かないよりは、前向きに動くことの大切さを教える。だが何か割り切れない大きな壁を感じさせられる。それが、国家や社会の体制なのであろう。グラミンバンクは、その壁を突き破ることができるのか、新しい挑戦に注目したい》と締め括るのも、グラミンバンクへの期待の大きさのあらわれであろう。しかし、国家や社会体制の《壁を突き破ることができる》のは、グラミンバンクではない。グラミンバンクを活用している貧困層の人々であり、彼らが生活意欲を高めて貧困脱却を探る中で、国家や社会体制の矛盾にぶつかり、グラミンバンクの理念を政治的行動として現実化できるかどうかにかかっている。

ユヌスが貧乏人を排除する銀行について、「銀行の貧乏人嫌いは、けっして偶然ではない。銀行とは元々そういうものなのだ。そもそも『担保』なるものを考え出したのは、貧乏人を排除するためなのだ」と語っていることについて、もう一度繰り返せば、貧乏人は資本主義的ではないから、最も資本主義的である銀行は貧乏人を排除する仕組みに導かれているということだ。逆にいえば、貧乏人のなかでは資本主義は発展しないのであり、資本主義は自らを発展させるためには貧乏人を障害として排除するのが必然なのである。そう、資本主義社会にとっての必然性であり、人間自身にとっての必然性ではないから、人間は各自の生活を豊かにしようとする必然性に即して、いかに資本主義社会における必然性を超えていくか、がたえず問われているといえるだろう。資本主義社会の中で生きていくことが多くの不都合をもたらしていくとすれば、一つひとつの不都合を突破することにおいて資本主義の原理を超えていけばよいのであり、グラミン銀行は資本主義が貧乏人を排除する仕組みになっているなら、そんな仕組みに従わずに自分たちの相互扶助の原理に根ざしてうまくやっていこうではないか、と表明して数歩足を踏みだしているのだ。

き文康隆は銀行のリスク回避策である担保主義がバブル崩壊後の日本経済に及ぼした悪しき結果について、こう語る。

《その担保主義こそ、日本の戦後の金融行政を支えてきた最後の砦だった。そもそも担保主義は資本主義を発展させるシステムでも何でもない。既得権を持ち、審査能力を持たない銀行が、自らに都合よく資産保全をはかる仕組みである。

結果として８０年代以降、規制継続によって過度に肥大化した日本の銀行は、土地を担保とした無原則な融資拡大に走り、土地バブルの元凶になるとともに、キャッシュフ

ロー経営への移行の阻害要因となった。》

銀行の担保主義に対して、グラミン銀行は土地などの資産ではなく、返済の連帯責任に担保を設定したともいえるのであり、評価額が流動的な土地の担保の危険性に対して、連帯責任の関係性が確立していくその未来性を担保としているという視点も垣間見せている。担保なし、少額融資の貧乏人相手なら、サラ金がそうではないか、とも思うが、き文はグラミン銀行とサラ金との決定的な違いについて説明している。

《グラミン銀行の収益モデルはサラ金によく似ている。貧困層を中心とした小口無担保の融資。非預金型の経営。世間相場を上回る融資金利――。それにもかかわらず、グラミン銀行が貧者をなくす画期的手法と呼ばれ、サラ金が社会のダニのようにいわれているのはなぜなのか。

経営の志、金利設定、勧誘態度など、違いを挙げればきりはないが、返済までを見越した「信用」システムの違いが最大のポイントである。顧客と金融機関の信頼関係の構築の違いといってもよい。

グラミン銀行の強みは、連帯責任という共同体の原理を融資の条件に組み込んだうえで、融資額を現実の収入で返済可能な範囲に抑え、融資対象を働き者の女性に絞り込むといった選別をしていることにある。これに対してサラ金は、徹頭徹尾「契約」至上型のビジネスモデルである。資金使途には関与せず、安易な融資システムを選び、多重債務を引き起こし他のサラ金につけを回すような融資拡大を厭わない。

日本のサラ金業は、融資金利の上限規制や、大手金融機関の積極的参入で新しいステージを迎えつつある。だが、リスクを避け、法人取引に安住してきた大手銀行が、消費者金融で成功するとも思えない。》

グラミン銀行とサラ金の違いはなにか。別の言いいかたをしてみる。一言でいえば、借り手と対等の関係に立つグラミン銀行は人間にお金を貸し、人間から返済してもらうのに対して、サラ金は収奪する対象にお金を貸すのであって、そこには「人間」は存在していない。グラミン銀行はお金を儲けることよりも、貸したお金が役に立って利子付きで返ってくることが主眼であるのに対して、サラ金は貸したお金が役に立つかどうかは眼中になく、儲けるために高利子付きでお金が返ってくるのが主眼である。だからグラミン銀行は相手が幸せになるようなお金の貸しかたをするのに対して、サラ金は相手がより一層不幸になってもかまわないようなお金の貸しかたをする、ということもできる。そう、グラミン銀行は貧困脱却をめざすが、サラ金はより一層の貧困へと叩き落としていく。サラ金と銀行は同類であるが、グラミン銀行は彼らとは異類であり、銀行のかたちをしているが、けっして銀行ではありえないのである。

グラミン銀行はサラ金や銀行のみならず、《アメリカニズムの行動原理をかかげる投資ファンドや投資銀行に対しても》一石を投じていることが、次に説明されていく。

《無学文盲の人に「書くことを強要する」バングラデシュの大手銀行に対するユヌスの批判は、いわば「契約至上主義」の行き過ぎに対する批判である。識字率が５０％程度

のバングラデシュと、１００％に近い日本では事情が違うと思うかもしれないが、契約型の取引が十分に定着していないにもかかわらず、あらゆることを法律的な正否だけで決着させようとする風潮こそ、ユヌスのいう「書くことを強要する」社会ではないだろうか。
「お金で買えないものはない」と公言していた堀江貴文や村上世彰の退場は、格差社会に批判的な論調のなかで受け入れられつつある。しかし彼らの本当の害悪は、契約に違反しなければいいという「法律的な正当性」と、株主の論理という「金融的な正当性」が、そのまま「社会的な正当性」であるかのような誤解を広げたことにある。
　そして、彼らを断罪した国家権力も、堀江・村上の法律的正当性のみを問題にし、「法律的正当性＝社会的正当性」という短絡的な論理を拡大しつつある。金融新商品や未公開株、さらには保険などをめぐるトラブルの続出は、金融的文盲が社会に引き起こしている混乱である。≫
　ユヌスの「契約至上主義」に対する批判も、銀行が貧乏人と同様に、無学文盲の人を一個の人間として取り扱わない仕組みになっていることへの批判と思われる。銀行が貧乏人や無学文盲の人を一個の人間として取り扱えないのは、顧客を一個の人間としてではなく、「契約」を通してしか人間として取り扱えないのと同様である。それはなにも銀行の欠陥ではなく、資本主義社会では資本との関係のなかでしか人間としてあらわれることができないという、資本主義の欠陥そのものにほかならない。もちろん、ありのままの人間が歪んでいないわけではない。怠惰に流れやすいし、隙あらばごまかそうとするだろう。それでもそのような人間を相手に、彼らが人間として生きていく意欲を向上させるような後押しにグラミン銀行は取り組んでいるのだ。貧乏人であれ、無学文盲であれ、彼らを排除する場所もまた、人間であることがみえなくなってしまう貧困であり、無思考の文盲であることを、グラミン銀行は逆に浮き彫りにしていたといえる。
「貧困脱出には生産力をつける以外に脱出方法はない」「裕福な層から富を取り上げ、それを貧困層へ渡すことではない。貧しい人が自ら解決策を見出せるよう、生産力をつけ、市場に参入する機会を提供すればよい」というユヌスの言葉に、《徹底した現実主義（プラグマティズム）に貫かれている》のをみるき文は、ユヌスをマックス・ウェーバーに重ねようとする。
　ウェーバーが資本主義の担い手として《勤勉さと自立心に富んだ新興ブルジョワジーの新教徒》を見出したように、ユヌスも「女であるために教育も受けられず、家のなかに閉じ込められていたイスラムの女性たち」を資本主義の担い手として見出しているというわけだ。そこから、《ユヌスのノーベル平和賞受賞の本当の意味は、「貧困からの脱出は、社会主義的な政策ではなく、自助努力による経済的な自立から生まれる」という哲学を世界が共有したということにある》という見方が導きだされる。
「自助努力による経済的な自立」はありふれてはいるが、ユヌスがグラミン銀行を通じてそのことを実際に行ってみせることよりも、「貧しい人が自ら解決策を見出せるよう」な道筋をつくりだしていることが、そして彼らがやがてお金を借りなくても生活がやっ

ていけるように、更にグラミン銀行のような「貧者のための銀行」すらもはや必要としない社会をつくりだすようになるまで、「自ら解決策を見出せる」力を可能性として潜在させていることが、なによりも希望の哲学にふさわしいといえるのかもしれない。

さて、ユヌスのノーベル平和賞受賞について、《貧困層を経済的に活性化したという意味において、ノーベル平和賞よりもノーベル経済学賞のほうがふさわしく、その場合はミシガン大学ビジネススクールの C・K・プラハラード教授と一緒に受賞するのが妥当だったのではないか》と主張するのは、『SAPIO』連載（０６．１２．１３）の大前研一である。インド出身のプラハラード教授の『The Fortune at the Bottom of the Pyramid（ピラミッドの底辺における富）』という０４年のベストセラー著書（邦訳版『ネクスト・マーケット』）について、大前はこう解説する。

《The Bottom of the Pyramid（ＢＯＰ）とは、１日２ドル未満で暮らしている「経済ピラミッドの底辺」の貧困層のことだ。その人口は世界で４０億人を超えると言われている。これまで民間企業は、食べていくのが精一杯の彼らを顧客としてはまともにとらえてこなかった。しかし、一人ひとりが使えるお金は少なくても、全体で見れば、ＢＯＰは巨大な市場である。貧困層に特有のニーズを抽出し、適切なマーケティングと商品・サービスを提供することができれば、ＢＯＰにおけるビジネスは元が取れるどころか、十分な利益を上げることができ、ひいては彼らの生活レベルを向上させて貧困国に経済成長をもたらすことが可能である、とプラハラード教授は主張している。このプラハラード教授の理論を金融で早くから実践していたのが、貧しい女性たちに無担保で少額融資（マイクロクレジット）をした「グラミン銀行」なのである。》

大前が、《この概念はマルクス経済学やケインズ経済学に匹敵する画期的なもの》だと瞠目する《理由は、ＢＯＰが従来の資本主義と真っ向から対立する概念だからであ》り、彼はこう記述する。

《いま世界には、１人当たりＧＤＰが１万ドル以上の富める先進国に住んでいる人々が約１０億人、そのレベルに向かいつつあるタイ、マレーシア、メキシコ、トルコなど一人当たりＧＤＰが３０００～１万ドルの途上国の人々が約１０億人いる。つまり、世界の人口約６０億人のうち約２０億人は、放っておいてもそこそこ文化的な生活が営めるレベルに達している。逆に言えば、それ以下の人々、すなわちＢＯＰの人々が、前述したように、まだ世界には約４０億人もいるわけだ。

そういう人たちが住む国の特徴は、極端な「富の偏在」である。持てる人と持たざる人の格差が想像を絶するほど大きく、ほんの一握りの人たちが９割以上の富を占有している。ただし、インドの場合は人口１１億２０００万人のうちの１億人ぐらいは中流階級と言われ、年間平均所得が１世帯当たり１万ドルぐらいになっている。インドの物価は日本の１０分の１以下だから、その人たちはけっこう消費購買力があって、それなりに充足した生活をしている。

問題は、あとの１０億人だ。その大半は、インドが「貧困」の定義にしている１日２

ドル未満で暮らしている。インドやバングラディシュなどのＢＯＰの人々、あるいは飢餓にあえいでいるアフリカ諸国の人々は、人間以下の生活を強いられ、生きる希望も意欲もなく、非常に早死にしている。

この人たちは、これまでは国連難民高等弁務官事務所やユニセフ、あるいは人道的な活動をしているＮＰＯやＮＧＯのチャリティの対象になっていた。それに対してプラハラード教授は、資本主義をピラミッドの底辺に導入してマイクロ経済が機能すれば、国全体が自律的成長を遂げることができる、としている。いわば「ＢＯＰ資本主義」である。その影響を受けて、インドでは社会的責任のある企業と経済人が一斉に動き始めた。私は今年、日本の経営者約５０人を連れてインドへ研修旅行に行ってきたが、視察した企業の経営者は例外なく「The Bottom of the Pyramid 」に最大の関心を持ち、その重要性を情熱を持って語り、プラハラード理論に基づいて事業を展開していた。》

具体的にどのように事業を展開しているのかを、次に列記している。

《たとえば、イギリス・ユニリーバのインドにおける合弁会社ヒンダスタンリーバは農村の貧困層の人々に対し、小さい袋に分けた洗剤やシャンプー、水を濾過（ろか）するマイクロフィルターなどを安く売ったり、救急絆創膏を箱から出して１枚ずつ売ったりすることで、衛生意識を何年もかけて辛抱強く植え付けている。あるいは、文字が読めない人たちに絵をクリックするだけのパソコンを貸与して、ユニリーバの商品を訪問販売できるように教育している。その対象は、ほとんどが夫に逃げられた子持ちの女性である。インドの男性はお金がなくて夫や父親の責任を果たせないため、子供を産ませたら家庭を放置して逃げてしまうケースが多い。残された女性は、仕事もない絶望的な貧困の中で途方に暮れていた。子供を働かせて現金を得ることで糊口をしのいでいた。そういう人たちに、ヒンダスタンリーバのマイクロ経済ビジネスは、生きる望みと働く喜びを与えたのである。

そのほかにもタタ財閥のラッタン・タタ会長もＢＯＰに熱心だし、ハイデラバードのＩＴ企業サティアムのラマリンガ・ラジュ会長も、アメリカから受託したアウトソース事業をネットワークで３０００もの村に配信してパソコンで仕事をさせる、ということを熱心にやっている。これは事業というよりも「布教活動」に近い。共産主義の中国が赤裸々な資本主義に傾斜していったのとは好対照である。

さらに、アラウィンドという病院チェーンは、貧困の原因の１つになっている白内障の手術を３０００円（２５ドル）ぐらいで受けられるようにした。インドは栄養の問題などで白内障の患者が多い。その人たちは目が不自由だから、働きたくても働けない。しかし、白内障の手術は高度な技術と高価な機械を必要とするので手術代が高く、貧しい人たちは受けられない。そこでアラウィンドは、白内障の手術をなんと〝２４時間操業〟にした。しかも、工場の流れ作業のごとく１５分毎に手術を行なう態勢を整えた。そうやって高価な機械をフルに使うことで、３０００円での手術を可能にしたのである。これが大成功して、病院はいつも長蛇の列。白内障が治って、生きる希望と働く意欲の

出た人が急増している。

さらに、ＩＣＩＣＩ銀行はグラミン銀行と同じように農村の貧困層向けマイクロクレジットで大成功を収めている。ＩＣＩＣＩ銀行は、もともとは日本でいうと日本興業銀行のような法人専門の銀行だったが、１９９８年に誕生したバジパイ前政権の規制緩和政策によって、法人部門だけでなく個人部門にも参入できるようになった。その時、個人部門は新規参入だから特徴を出そうということで、マイクロクレジットを始めたのである。

とはいえ、インドで田舎の農村に入っていくのは容易ではない。たとえば、中南部のアーンドラ・プラデーシュ州（州都はハイデラバード）には村が約３０００もある。そのほとんどが電気も通信網もないという劣悪な状況に置かれている。しかも、村から村へと訪問販売をしようにも、まともな道路がなかったり大雨が降ると寸断されたりして、移動の困難な所がけっこうある。そういう環境では支店を開設することができないから、個人を支店代わりにする。つまり、人間の支店ネットワークを作るわけだ。その個人支店の人たちが周辺の村の人々を回り、５人１組で順番に無担保の少額融資をする。グラミン銀行と同じシステムである。村人たちは仲間同士で勉強しながら借りた金で何をするかを話し合い、徐々に向上することによって生きる希望や喜びを持てるようになっていく。このマイクロクレジットが経済の活性化に寄与し、結果的にＩＣＩＣＩ銀行は、法人部門も個人部門もトップのインドで押しも押されもせぬナンバーワンの銀行になったのである。》

プラハラード教授の「ＢＯＰ経済学 」がインドのさまざまな現場で開花している現状に基づいて、大前はマルクス経済学やケインズ経済学やミルトン・フリードマンのレッセフェール（自由放任）経済学などのこれまでの経済学が金持ちを対象としてきたのと異なって、《貧しい大衆に富をもたらす学問になろうとしている》と賞賛し、《世界４０億人の貧乏層に希望を与え》るという《経済学の本来あるべき姿》を垣間見せている点で、プラハラード教授とグラミン銀行の《ユヌス総裁の２人にノーベル経済学賞を贈るのが正解だったのではないか》と主張するのである。

資本主義社会では、富は集中しても偏在することはない。したがって、プラハラード教授の「ＢＯＰ経済学」やグラミン銀行のマイクロクレジットがいくら勢いを増したとしても、主流になることはありえない。あくまでも富の集中が加速化するなかでの、アンチテーゼとしての隙間にすぎないと思う。だから資本主義社会における経済学のありかたとして、大前の言うように《経済学の本来あるべき姿だ》とけっして思わない。前述したように、「ＢＯＰ経済学」やグラミン銀行は資本主義の枠組みのなかで評価される以上に、資本主義を超えていく未来の社会を胚胎しているようにみえる点こそが、もっと評価される必要があるにちがいない。《世界４０億人の貧困層に希望を与え》るその試みが、資本主義制度によってもたらされる貧困そのものに終止符を打っていこうとする希望を秘めていることがなによりも重要なのである。　　２００７年1月１２日記